

所員自著紹介

1. 熊谷謙介（編）『男性性を可視化する ― 〈男らしさ〉の表象分析』

青弓社，2020年2月，286頁。

共同研究グループ「ジェンダーと〈身体〉」のメンバーを中心として執筆し、人文学研究叢書の第44巻として出版された論集である。20世紀の文学・芸術において表現された多様な男性像を読み解き、常にマジョリティであったがゆえに見過ごされがちだった「男らしさ」をあぶりだす試みである。ドイツ表現主義から現代アートまで、渡米した中国演劇人の経験から男性ダンサーによる『白鳥の湖』まで、男性性は時代・地域によってさまざまな変化を見せ、媒体となるメディアによって変容していく。また20世紀において男性性が強く打ち出されたのはアメリカであり、ときに戦争や人種差別と絡まり合いながら歴史を動かしてきたと言える。

一方で、「男らしさ」という問題設定は「男とは……である」という本質主義的な定義を招く場合もあり、危機に陥っているとされる男性性の復権という動きも招きやすい。本書では、多様な性表象という視点をとり、男性の周囲にいる母や子ども、同性グループといった変数を導入することで、男性性を唯一の本質に還元することを避けることを目指した。ホモソーシャルやプロロマンス、ヘゲモニックな男性性といった、注目されつつある概念と連関させながら、今後さらにフィールドを広げた男性表象論が展開されることを願っている。

2. 松本和也『太平洋戦争開戦後の文学場 思想戦／社会性／大東亜共栄圏』

神奈川大学出版会，2020年5月30日，355頁。

本書は、これまでの文学史（研究）において、種々の理由・事情から迂回されてきた太平洋戦争開戦後の文学場を検討対象として、言説分析を通じて考察した研究書である。また、論者にとっては、昭和10年代の文学場を研究対象とした拙著『昭和一〇年代の文学場を考える 新人・太宰治・戦争文学』（立教大学出版会，2015）、『日中戦争開戦後の文学場 報告／芸術／戦場』（神奈川大学出版会，2018）と通底する問題関心による、研究成果の第3でもある。

太平洋戦争期、思想戦の戦士としての活躍が期待された文学者たちは、大東亜共栄圏を謳って展開される戦局の中、国家・国民のためにどれだけ役に立てるのかという社会性に、それぞれのスタンスで向きあっていった。本書では、これまででいねいに検証されることのなかった太平洋戦争開戦後の文学について、同時代資料の広範な調査・分析に即して、言表された限りにおける文学者の言動や作品、評価軸の変動について考察した。

3. 島川崇（単著）『新しい時代の観光学概論 持続可能な観光振興を目指して』

ミネルヴァ書房，2020年11月，248頁。

「観光学は学際的な学問である」

この言葉を何度聞いたことか。社会学，文化人類学，都市計画，経営学，経済学，語学……あらゆる

分野から研究者が観光学に集っている現状を表した言葉である。しかし、その出自が確立された学問分野であればあるほど、自分の研究分野（ディシプリン）が「観光学」であると語ることを躊躇する研究者をよく見てきた。今は観光が注目を浴びているから、観光に集ってきているけれど、これがもし世間の観光への注目がなくなったら、または、最悪、世間が観光を目の敵にしたりするような事態になったら、そのような人たちは、自分の観光への関与の痕跡を我先に消すだろう。観光学を学んで観光学の研究者や大学教員になった人はまだ数えるほどしかいないから、それはある意味やむを得ないのかも知れないが、そこに、観光学というこの新しい学問を確立させようという気概は感じられない。今、観光学には一貫したメッセージが必要である。それがなければ、外部環境の急激な変化にただおろおろするばかりなのだ。今観光学が考えていかなければならないことは、何よりも観光の持続可能性だ。そして、観光を持続可能にするためには、商業的に成立すること、全てのステイクホルダーが倫理観を持つこと、歴史や背景、ストーリーを大切にすること、それを語る語り部の存在をもっと大切にすること、人間の存在と積み重ねてきた業績をリスペクトすること、これを最初から最後まで貫き通した今までにないテキストとなったと自負している。

4. 島川崇編著、神田達哉、青木昌城、永井恵一著『ケースで読み解くデジタル変革時代のツーリズム』ミネルヴァ書房、2020年11月、293頁。

2010年代後半から「近い将来AIによって人の仕事が奪われていく」といった論調が喧しくなった。一方、観光の分野では空前のインバウンドブームが席卷しており、人手不足が大いに課題となっていた。経営者を中心に、AIに対する期待は否が応でも高まっていた。世間がAIに対して期待と恐怖とを併せ持った複雑な感情でアプローチする中、本書の執筆メンバーは、当初から、あまりにもAIに対して過度な期待や過度な恐怖は本質を見誤ってしまうのではないかとの問題意識を持っていた。島川は、労働者にとって害悪となるものは、AIではなく、そのAIの本質を見誤り、やたらと恐怖を煽り、思考停止したおかげで正常な判断ができなくなってしまった経営者層やマネジメント層にほかならないと指摘した。それを踏まえ、AIをコントロールしていくには今後どのようなマインドが必要になっていくのか、そして、顧客とのコミュニケーションはどのように変化していかなければならないのかを4名の執筆者がそれぞれの専門分野から考察した。これからの新しい時代を作っていく組織と人材に関して、デジタルに振り回されることなく、デジタルをツールとして使いこなせるようになるためのマインドセットを本書は構想段階から一貫して検討してきたが、凶らずもコロナのおかげでそれが具現化できる可能性が高まっていると実感している。来るべき未来が、さらに人を大切にする世界になるように願いながら執筆した著作である。

5. 松本桂樹・榎本正己『上司と部下のメンタルヘルス・マネジメント対策』税務研究会出版局、2020年12月、200頁。

本書は、大阪商工会議所が実施するメンタルヘルス・マネジメント検定試験の1種マスターコース（人事労務担当者・産業保健スタッフ向けコース）の合格者に向けて定期的に発信しているメールマガジンの内容をベースにして、昨今のトレンドを踏まえ職場におけるメンタルヘルス対策を論じた内容となっている。

昨今、勤労者の精神疾患の発症背景にパワハラ問題が取沙汰されており、2020年6月に労働施策経

合推進法（いわゆるパワハラ防止対策法）が施行となって、企業にパワハラの防止対策が求められるようになってきている。加えて、コロナ禍により勤労者の働き方が大きく変化し、特にテレワークの導入によってこれまでになかったトラブルへの対処法が求められるようになってきている。

本書は全体で4章構成となっており、1章「今、働く現場で何が起きているのか？」では、コロナ禍によって生じている職場動向を概観し、2章では「パワハラの定義と法改正」として、厚生労働省が示すパワハラの定義、そして分類等を解説している。3章では「事例で分かる 問題とその対処法～上司と部下のラインケア編～」として、メンタルヘルス対策の中核となるラインケアの実際を解説し、4章では「事例で分かる問題とその対処法～ウイズコロナ編～」として、コロナ禍において必要な具体的対策の事例を紹介している。

(松本桂樹)

6. 中村隆文『世界がわかる比較思想史入門』

ちくま新書、2021年1月、256頁。

本書は、古今東西の宗教や哲学といった「思想」の概要を説明するとともに、それぞれの思想のもとで生きる人々の価値観・人生観・世界観の構造を示し、それぞれの思想間での比較をしつつ、その共通点や差異を論じたものである。

最初に、西洋的価値観の土台にある「ギリシア思想」とその影響を受けた「ローマ文化」、そして、中東からヨーロッパ、そして世界各地へと影響力を及ぼした「ユダヤ教」「キリスト教」「イスラーム」について解説する。その後、インド思想や中国思想を論じるなか、個として真理に沿って生きること、そして社会集団として「理」に沿って生きることとはどういうことかを論じる。中盤では、東洋思想の一つでありながら、日本という土地柄や歴史的事情のもとで生まれた日本思想——その事例として、武士だけでなく町民（商人）の道をも示す新たな儒学を提唱した石田梅岩や、江戸時代以降に日本独自の「もののあはれ」を発見した国学の世界観など——を解説する。

後半から最終章にかけては、近代哲学から現代哲学の流れを紹介しつつ、「自分の人生を生きる」とはどういうことかを、ハイデガーやデリダなどを引き合いに出しながら、そこにおいて仏教的な「空」や一意専心の考え方などの共通点を論じてゆく。

異なる思想や価値観の人々同士が完全に見解を一致させたり、うまく相手に合わせることはたしかに難しい。しかし、相手がどのように世界を見て感じているのかを少しでも理解することで、どこまで相手を受容できるか、どこまで譲歩できるか、そしてその限界がどこにあるのかを見定めることができるだろう。それこそが、より現実主義的な異文化交流を可能とさせる鍵であり、比較思想史という学問はその鍵を提供するものといえるのである。